

『医心方』に見える鑑真方 について

三 井 駿 一

鑑真和上(六八八—七六三)の我国医学への貢献は遍く知られるところで、『日本国見在書目録』(八九一頃)は『鑑上人秘方』一卷の撰述があつたことをしるしているが、惜しいことに今は伝わらない。しかし『医心方』(九八四)には「鑑真方」または「鑑真」として葱、紫雪、紅雪、呵梨勒²の薬名を掲げ、それぞれ心痛、脚気、心悸亢進、風痲、熱痢、天行熱病など、また賦活強壯薬としての鐘乳の用量を引用する。恐らくこれらは『鑑上人秘方』に出たものであらう。それは次の四条(演者読み下し)である。

一 鑑真方、心痛ヲ治スルノ方、大驗アリ、醋半升ニ葱白一莖ヲ切りテ和シ煎ジ、頓服セシムレバ立チドコロニ愈ユ。(卷六心痛方第三)

二 鑑真云フ、若シ脚気衝心セバ一小両ヲ取り水ニ和シ

テ之ヲ飲マシム。又紅雪五、六両ヲ服セシム可シ。又呵梨勒丸モ良シ。(卷八脚気腹ニスルノ方第八)

三 鐘乳ヲ服スルハ年齒ニ随フ方、石鐘乳ハ其ノ味甘温、毒無シ、年廿ノ者ハ二両ヲ服セシム。乃チ五十ニ至ラバ五兩ヲ服セシム。六十已上ハ加ヘテ七兩ニ至ラシム。各々年ニ随ヒ之ヲ服セシムルヲ吉トス。卅已下ノ人ハ一兩ヲ分チ兩服ト為シ、五十已上ハ一タビニ一兩ヲ服セシム。兩別ニ麵三兩ニ和シ攪搜スレバ麵硬マル。漉(捏)テ鈍ニ作り五升鐘(鍋)中ニ入レ煮テ五、六タビ沸シアグレバ即チ熱ス。酒ニ和シ汁ノママ之ヲ尽ク服セシム。竟レバ煖飯ヲ以テ之ヲ押フ。七日已来忌ムコト薬法ノ如クス。(卷十九服石鐘乳法第十六服乳法鑑真石鐘乳ヲ服セシムルノ方第十六)

四 若シ脚気衝心セバ一小両ヲ取り水ニ和シ之ヲ飲マシム。若シ心戦衝スレバ半小両ヲ取り消セシム。已ニ水下ラバ亦得。若シ風痲有ラバ時々之ヲ服セシムルコト前ノ丹石ヲ理ムルガ如クス。若シ丹、頭痛ヲ発セシメ、身体急ニ、或ハ寒熱シテ飲食スル能ハザレバ即チ一兩ヲ取り少シク芒硝ヲ加ヘ、水ニ和シテ之ヲ飲マシム。若シ熱病

アラバ亦前ノ如クニシ、若シ天行熱病アラバ亦前ノ如ク
ス。若シ痢セント欲スレバ之ニ一倍ヲ加ヘ空腹ニ之ヲ服
セシム。若シ邪氣アラバ漸々ニ服セシムレバ即チ並ビ可
也。鑑真方（卷十九服紫雪方第十八）

これら和上の記述について少しく私見を述べると、
1 心痛に対する類似の処方⁵は孟詵（六二一—七一三頃）
の『食經』に出た「酢に青木香を摺り下ろして飲ませる」
法であるが、和上の処方⁶は特異とできる。

2 脚氣衝心に紫雪、紅雪を処方するのは『千金方』
（六七〇頃）、『千金翼方』、『外台秘要』（七五二）、『聖恵方』
（九九二）に見えない。訶梨勒を同じ病症に複方として五方
を『聖恵方』で初出する。単方として早く我国にこれを導
入したのは和上であつたと思われる。

3 五石散⁶の服用はあらゆる面での日常生活の活性化を
意図したもので、不老長生を志向する丹と同じでない。漢
代に起源し六朝に最も盛行した。薬物には主として鐘乳が
愛好せられたらしい。用量を誤ると薬害の恐れがあり、
『医心方』は実際の体験者としての和上の処方を重視した
のでなかるうか。

4 紫雪、紅雪について『医心方』卷十九はそれぞれに
項目を立てるが、その組成については解説がない。『聖恵
方』に同名で合剤を載せるが、前者には朱砂、後者には金
を成分の一とする。思うに神仙家の秘方で鍊薬の手順、服
用後の嚴重な食忌みが必要としたであろう。『服石論』¹⁰に
淮南八王紅雪方の名が喧伝せられると説かれているから、
和上の故郷揚州で賞用せられた処方であろうか。

〔注〕

1 江戸医学館本（一八六〇）による。札記と照合して本文に
異同がない。

2 カリロク Terminaria chebula Retzius 『唐本草』（六五九）
で新付されたが、既に『金匱要略』（二〇〇頃）嘔吐、嗽、
下痢病脈証治第一七に訶梨勒散として処方があり（新校正で
は張仲景の方でない）と疑われているが、『南方草木状』（二
六〇頃）に図を載せ、正倉院に将来品が現存する。『広濟方』
（七二三）『外台秘要』引）に制吐剤として用いられる。

3 丹薬、石薬の服用による薬害の処理法が同書に前出してい
ることを示す。

4 『病源論』（六一〇頃）に、「若シ風邪胃ニ在レバ則チ嘔ク」
とあるので嘔気と解する。

5 『医心方』卷六治心痛方第三に引用がある。『日本国見在書
目録』には『食療本草』の名でしるされるが、通称をかく唱

ナ

えたのであろう。現存しない。

6 別に又、寒食散、解散と呼ぶ。五石は紫石英、白石英、赤石脂、鐘乳、石硫黄を言うか。孫子邈による適用量が『千金方』巻二四に出る。

7 『千金要方』巻一五大補養第二張仲景紫石寒食散治傷寒已愈不復方に載せる。『金匱要略』雜療法第二三に見えるところ酷似する。

8 『医家千字文』(一二九三)に「泰山鐘乳、蜀江金牙」と言うのは『新修本草』(六五九)に拠ったものであろうか。狩谷掖尊(一七七五—一八三五)は上質品の産地を備中国英賀郡とし、貞觀元年(八五九)二月二日に備中国で採取のあったことを記す(『箋注和名類聚抄』)。

9 『全唐詩』(一七〇七)第一函第七冊に孫思邈の鍊金の四言詩を載せる。

10 『医心方』巻一九服紅雪方第一七に引用する。『隋書』経籍志に出る。

〔付記〕

1 図書寮叢刊『新修本草残卷』(昭五八)巻第一四の訶梨勒の条「水磨或散水」は「水摩或散」で散下の水は行、水剂、膏剂、散剂の義である。

2 拙著『唐招提寺鑑真和上秘方薬(茶)をめぐる』和漢薬一八六 昭四三

(帝塚山学院大学)

『医心方』の伝写について (Ⅳ)

愛知県下にある『医心方』写本

杉立義一

愛知県下には次の二種の『医心方』写本がある。

一、蓬左文庫所蔵の写本廿卷廿冊

これに「医心方目錄」がついている。

陵居	第一卷	夫黄	第二卷
治髮	第四卷	治水	第五卷
治胃	第六卷	治陰	第七卷
汁服	第八卷	去腫	第十卷
治卒	第十四卷	苾消	第十七卷
治服	第廿卷	婦人	第廿二卷
産婦	第廿三卷	治利	第廿五卷
馬勃		養性	
引於		治小	
薬多		膏熱	

右総計二十冊